

# 寺田寅彦と RÔMAZI SEKAI

四宮義正

初めて寺田寅彦全集を購入したのは大阪駅前の古本屋で見つけた昭和25年版の18巻本であった。昭和60年に2次刊行されたのを購入して古い版は処分してしまった。これらは読むことなく本棚に眠ったままであった。やがて新編集の全30巻が刊行されたが、謳い文句のひとつとしてローマ字の巻を和文表記したとあった。最近やっと読み始めたが、もしローマ字のままであればなかなか読めなかったであろうと思う。ローマ字の良さもあるだろうが慣れないと多くは読めないものである。

このように寅彦のローマ字作品について、和文から入ったのであるが、味わいのある小品が多いと思う。掲載されたのが「ローマ字世界」という雑誌であることは漠然と知っていた。

最近インターネットを見ていると、この雑誌の最初の2年分が出ている事に気がついた。表記は「RÔMAZI SEKAI」となっているが縦書きで「ローマ字世界」とも併記されている。日本のローマ字社の発行であり、田中館愛橘や田丸卓郎が中心になって活動したものである。寅彦はこの二人の師に導かれて味わいのあるローマ字文を書いた。

田丸は多くの著書をローマ字で書いて日本のローマ字社から出しているが、発行所の住所をみると東京市本郷区駒込曙町11番地となっており、ここは田丸の居宅住所である。田丸の尽力が非常に大きかったことがよく分かる。

2年分を通観してみるとローマ字雑誌といっても和文によるローマ字の文法説明、理論解説などがあり、子供向けのお話もあってローマ字の普及を目的のひとつにしていることが窺える。

主な執筆者は田中館愛橘、田丸卓郎、土岐哀果、芳賀矢一、寺田寅彦、大槻文彦、田丸節郎、藤原咲平、山崎直方、岡田武松、田丸陸郎、今村明恒、井上円了、内藤濯、坪井正五郎、大河内正敏、石川千代松、田中正平などであり、東京帝国大学の教授など当代の学者が多い。

第1巻には表紙が無いが、第2巻では各号に目次のある同じ絵柄の表紙がついている。

すでに寅彦全集にはこの「ローマ字世界」掲載分は網羅してあるが、それ以外に寅彦の痕跡が読み取れないか、またローマ字雑誌の雰囲気を知りたいと思い眺めてみた。



第2巻4号表紙

記事は署名入りもあるが、無署名や頭文字だけのものもある。ここで困ったのが署名に T. - T. が多い事である。これでは田丸卓郎と区別できない。しかし、それを含めて全集掲載以外の文章で寅彦作ではなからかと思われるものを探してみた。

1 巻 1 号は明治 44 年 7 月の発行である。寅彦が欧州留学からアメリカ経由で横浜へ帰ったのが同年 6 月 22 日であるから、寅彦の帰朝を待って発刊されたようにも思われる。事実この 1 号の「ローマ字だより」の欄に「今度西洋から帰られた寺田博士もこの雑誌のために力を添えられる筈である。博士が世の常の理学者に似ず趣味の人であることは人の知ることである」と書かれている。

#### 作品 1 西洋名所 Prebischtor(プレビシュトラ) の石の門 (1 巻 1 号)

署名は T. - T. である。ドイツとオーストリアとの国境に“ザクセンのスイス”といわれる景色の好いところがあり、そこにあるアーチ状の岩が写真入りで紹介されている。

現代の地図を見ると、ザクセンのスイスはドイツとチェコの国境(チェコ側)にありドレスデンからエルベ川をさかのぼったところである。最寄りのラインハルトシュドルフ＝シェーナまでは電車で 1 時間半くらい、さらに徒歩数時間はかかりそうな山中である。

明治 42 年 7 月 26 日付けで夏目漱石、楠永直枝、大河内正敏、寺田寛子宛てに絵はがきを出しているが、それによると同年 7 月 24 日～25 日に物理科学生 4 人でドレスデン万国写真博覧会を見物していることが分る。各人にラファエロの聖母の像、いわゆる「ドレスデンのマドンナ」を見学した感動を報告しているが石の門に関しては何も書かれていない。もしもそこから往復すれば少なくとも 1 日を要したと思う。ドレスデン行は土日の休みを利用しており石の門へ行った可能性は低いが、買った絵はがきを見て書いた可能性はあると思われる。

文には 8 月末に居たとあるが、ドレスデンに行ったのは 7 月末である。しかし思い違いがあるかもしれない。田丸卓郎も明治 35 年 3 月から 38 年 6 月までドイツへ留学しているが動きがよく分からず推定できなかった。

#### 作品 2 鶏の種類と人為淘汰 (1 巻 2 号) 無署名。

人為淘汰の例として土佐の長尾鶏が絵と共に紹介されている。文章を書かないまでも話題と写真を提供した可能性は高いと思われる。

#### 作品 3 秋が来た (1 巻 3 号の巻頭) 無署名。

夏休みが終わったことを短詩的に書いている。「夏休みの記念—土佐鏡川の鮎釣り」と題した写真が掲載されている。少なくとも写真を提供した可能性は高いと思われる。

#### 作品 4 軍艦の火山 (1 巻 11 号)

署名は T. - T. である。科学読み物といった内容で、炎を噴き出して走るイギリスの軍艦を火山に例えて紹介している。田丸の作かもしれない。

#### 作品 5 生蕃<sup>せいばん</sup>の大学見物 (1 巻 12 号)

署名は T. - T. である。明治 45 年 5 月 7 日(火)の寅彦日記に「上京中の生蕃一行理科大学参観」とあり、印象に残っていて明治 45 年 6 月発行の雑誌に書いたのかもしれない。

表紙の目次には「台湾生蕃の大学見物」とあり台湾の先住民一行が大学に来たことが分る。

作品6 独逸学生の決闘（2巻2号）無署名。

和文で、決闘の組合、仕合の度数、装束、付添人其他、仕合の模様、面白い組合気質、黙許された決闘、の小見出しを付けてローマ字でかなり詳しく書いている。写真もあり「白と赤の決闘、剣を斜に構えているのは付添人、真ん中審判官、記録係、外科医者」と説明がある。白と赤は決闘する学生組合の印である。最後の「黙許された決闘」には、「これは日本の剣術などと違って、血が出る、痛い。傷がもとで死ぬ者も毎年二人や三人はある。ちょっと命がけの仕事である。それだけ学生の胆力を練る助けにはなる訳でこの野蛮の習わしもドイツでは一法律には禁じてあるけれども一黙許の姿になっている」と書いている。

高辻玲子さんが書かれた『ゲッティンゲンの余光』に高辻亮一の日記が紹介されているが、明治44年1月20日（金）にドイツのゲッティンゲンで高辻が寅彦と一緒に「決闘見物」に行ったことが記載されており、生々しい筆致で詳しく決闘の様子が書かれている。

寅彦の日記や書簡で決闘に触れたものは見当たらないが、高辻の日記の内容とローマ字文の類似から考えて寅彦の作である可能性が非常に高いと思われる。

作品7 ベックリンの絵よみの島（2巻4号）

この号の表紙に書かれている目次には理学博士寺田寅彦とある。本文の署名は Terada. である。寅彦の作と確定できるが全集には収載されていないので全文を紹介する。

## Böcklin no E, Yomi no Sima.

### ベックリンの繪よみの島

Terada.

Umi daka Kosui daka wakaranai ga, hukai Midu no Soko kara masuguni tukideta yôna Iwa, makkurona Saipuresu no Mori, sinda yôna sidukana Midu no ue wo Oto mo naku subette yuku Kobune, Hune no Hesaki ni noseta Hitugi, massirona Kinu ni tutumareta Hito no Usirosugata ; subete ga samisii to iu yoriwa kurai, kanasii to iu yoriwa omoomosii Kanzi wo okosaseru.

Kono E wa Doitu no Böcklin(ベックリン) to iu Ekaki no Kessaku no hitotu de, "Toteninsel"(トテンインセル, Yomi no Sima) to nadukerareta mono de aru.

Böcklin wa kore to hotondo onazi yôna E wo, kono hokani itutu kaite iru.

Böcklin wa, Ekaki to iu yoriwa musiro Sizin da to hyôsite Hito mo aru ga, tonikaku kono Hito wa zibun no Atama no naka ni ukanda "Toteninsel" wo E ni kaki-arawasô to site, nanbenmo iroioto kuhûsita mono de arô.

### ベックリンの繪 黄泉の島

寺田

海だか湖水だかわからないが、深い水の底からまっすぐに突き出たような岩、真っ黒なサイプレスの森、死んだような静かな水の上を音も無くすべって行く小舟、舟の舳先に載せた棺、真っ白な絹に包まれた人の後姿、すべてがさみしいというよりは暗い悲しいというよりは重々しい感じを起こさせる。

この絵はドイツのベックリンという絵描きの傑作のひとつで“Toteninsel(トーテンインセル、黄泉の島)”と名付けられたものである。

ベックリンは絵描きというよりはむしろ詩人だと評した人もあるが、とにかくこの人は自分の頭の中に浮かんだ“Toteninsel”を絵に描きあらわそうとした、何遍もいろいろと工夫したものであろう。

(筆者注) ①サイプレス：cypress 糸杉(イトスギ、喪の象徴)

②Toteninsel：ドイツ語、Die Toteninsel「死の島」



「死の島」第5バージョン(ウィキペディア)

アルノルト・ベックリンは1827年(文政10)スイス生まれの画家であり、紹介されている絵は現在「死の島」と題されている。

1880年(明治13)から1886年(明治19)にかけて同じ題名で描いた五つのバージョンがある。

元の文章には白黒の不鮮明な写真が付いているがよく比べて見ると第5バージョンであることが分る。

寅彦はヨーロッパ留学中にどこかの美術館で見学したか、画集などで見て絵ハガキを買っていたのかもしれない。

**その他** ローマ字日より(宣伝広告)

作品ではないが第2巻6号に田丸卓郎の「Sindô」と寅彦の「Umi no Buturigaku」の宣伝広告が出ている。中央气象台での講演を基に理学シリーズの1の巻、2の巻としての出版が予報され、ローマ字文で書いた学術上の本の先駆けであると紹介されている。次の7号(大正2年1月)では「海の物理学」について、和文で「去年のうちに出来る筈でしたが年末に際して丁寧な印刷製本が出来悪い為に、新年になってから出すことにしました」とある。田丸卓郎等の苦労が偲ばれる。9号になるとやっと印刷が終ったのか、和文で「海の物理学 定価七十銭 郵税六銭 海に関係のある人海に興味を感ずる人、否海の国の人なる日本人全体に此本を御勧めします。我国に於ける物理学的海洋学の唯一の本です」と書かれている。郵税とは聞き慣れないが郵便料金の旧称である。

寅彦の著した数少ない専門書であり、和文で書かれていたらもっと売れただろうと思われるが、当時としては田丸に協力する気持ちが強かったのであろう。

2年分を通観した限りで気が付いたのは以上であるが、これ以降の巻も見てみたいものである。

(附記) この稿を草するにあたり、公益財団法人日本のローマ字社(ウェブサイト <http://www.cityfujisawa.ne.jp/~roomazi/>)から資料の提供を受けました。ありがとうございました。